中国南部の葬送習俗を再び考える

和田謙寿

一

今まで数回にわたり中国大陸を巡検し、葬送習俗を具さに観察する事が出来た。しかし中国の南部地方を除いてはよほどの事がない限り、昔日の葬送習俗を見ることが出来なくなった。そこで厦門・泉州を中心とした南中国をもとに考察する事にした。幸いにも私が十数年来葬送の研究に精出してきたところのマレイ半島や台湾の中にも、中国南部の人たちが居住しているので、その地域の葬送儀礼の大様を略知ることが出来たわけである。尚、泉州市民政局出版による「泉州旧風俗資料」一九八五年版を、蔡瑞欽氏より入手出来、また民政局の方々より種々の御指導を賜ったことは、この調査に偉大なる力となった。

泉州は対岸を台湾に接した厦門市の近郊にあり、中国でも農耕に適し、産業的にも飛躍している古来より文化の栄えた地域である。華僑の出身地でもあり、中国政府もその立場を重視しているためか、葬祭の儀礼も中国としては割に保存されているところの地域である。以上なわけで、今回特にこの地方を対象とした次第である。しかし、これからも対岸の台湾と対比しつつ、更に詳細な点にわたり考察して行く事にしている。

泉州における風俗儀礼の特色は至って多いがこれを大別して二つに分ける事が出来る。一つは冠婚葬祭の面が大変に派手であること、一つは迷信に関する事々が割に多く存在することである。特に葬式に関する問題は意外に多く、一人の死者が出るとずつと埋葬をするまで色々の手続を経なければならぬのである。

その手続の規模ならびに費用は各人の経済事情、死者の身分と地位、各村の風俗等によっても多少異なる。贅沢については古い歴史があり、葬式が非常に簡略で質素の場合は近隣において非常に恥かしい事であるとされ普通の百姓の場合葬式があると必ず贅沢にせねばならぬようになっているようである。若しもそのようにしないと礼儀に違反するものであると考えられている。十三世紀のはじめ頃から泉州でもそのよ

うになっていると考えられ、明から清の時代にかけても盛んであり、その習慣は今でも変えていない。泉州近郊の地方史にはそのように書かれているが、その意は葬送の儀の重要である事を示したものである。それ故葬送を親戚や友達を呼ばないで済ましてしまうと、この上もなく恥かしいことになってしまう。迷信も割に多く信じられているが、とくに神様や鬼などを重視したものが多い。この地方では昔から仏法が流布し地方誌などでも葬式をする時迷信を重視せねばならぬと云われている。泉州での葬式の歴史を考察する場合「風水」の問題を避けることは出来ない。風水に頼るが故に、兄弟や親戚の間で争が生じ、壁を壊したり裁判沙汰になったりしている。つまりは風水を重んじるが故に色々な問題が起っているのである。民国の軍閥時代には風水に関係ある事件によって二十七名も死んだ事があり、開放後は共産党の役人が封建的な社会的悪習を退けたのでこのような事が少なくなったと云われている。

葬送の習俗には八つの見方があり、收殮・停柩・功徳・出葬・服喪・風水・禁忌・雑聞等に分けられる。

收殮・病人の死の直前、俗に云う臨終の時である。病人が長老等によっていよいよ死の断定を受けた場合にはホール（正庁）の中へ移されて正式に寝かせられる。

老人や長い間病床についている病人の場合には葬式の準備を始めるのが通例である。

中国北部邑色県城の農村（解放前後）においては病人が危篤状況になった時、子孫[1]たちは寝台の前で見守り、一族の年長者が主となって病人に寿衣（老人が天寿を全うした時に着用する衣）を着せる。寿衣は死者に着せる衣服のことである。寿衣の上衣は全部で五枚からなり、「五個領」といわれ五世代同居、あるいは五人の子供が科挙に及第を意味する。領子とは襟カラーのことで、「五個領」とは、襟のあるものを五枚重ねて着ることである。同時に棺（棺材）を自分の死後のために準備する事を求められている。

泉州では息を引とったあと、孝男（長男）は町に壺を買いに行くことを求められる。これは瓦のお皿に類したものであり、紙銭を焼くために用いるものである。これは必ず息子が買いに行くべきもので他の者では許されぬ事である。ただし特例があり、息子の年令の小さい時（子供のある場合）または旅に出ている場合には他の縁故者が代る事が出来るとされている。瓦の破片または土を拾ってきて死体の前に置き線香立てをつくって線香を灯す。死体は布で包み中を見えないようにし、家族は死体のそばの上に草を敷き、その上で泣く。死者の妻は髪をバラバラにして、死体の前下に油の灯を点し、紙銭を焼いて親戚の人達も泣き叫びながら、「あなたのこれから行く道の通行費を買ってあげます。」と。かねを払いア

ヒルの卵を焼いて御飯をつくる。これを中国では「マクラゴハン」と云っている。一部の葬礼の主祭者たちは死者の生前の日の事々、つまり「生まれた日、死んだ日、等々」を、僧や道士、風水師に卜してもらい、入棺の日時、出棺の日時等を決めてもらうのである。これを開斗書と云う。一部の役目の人たちが、それぞれの知人親戚のもとに知らせに行く。これを報死と云う。一部の人たちが棺桶と死者に着せる衣服を買いに行く。棺桶の木の種類は色々あり、また値段も上下がある。上等なものは杉の木四枚と頭の部分二枚、これを「全成板」と云う。下の方は二枚の板でつくられ、五合と云う。一番下のものは薄釘で、杉も永春杉、福州杉により値段もちがうと云う。死者棺桶に入れる服装も、寿衣も重を以って単位とされ、重衣の着数は少なくとも七着である。重は、上着とズボンを分けて計算している。中に布を二枚使用している厚目のものは二重として計算している。皮製の服は使用してはならない。靴も皮のものは使ってはいけない。布のフトン一枚、これを「水被」と云う。顔を被う布を一枚、重要なものであり、泉州では罵る時の諺として「あなたの前世（祖先）は、顔を被う布を使った事がなかったのでしょう。」と云う言葉を述べて軽蔑するが如きがそれである。金持は全匹の白布をつかう。その中には生きている時に着物を用意している者もあると云われる。これを張老衣裳と云い生前に写真をとっている者もある。生前、西瓜の皮のような帽子を被っている者もあった。女性はドレスのようなものを被っていた。生前棺桶を造っている人は時折その修理に追われていた人もある。上等の棺桶は木の下を一枚追加して七つの星を彫り、七星枋と云っていた。棺桶を運んできたら孝男は門前にて（または玄関にて）涙を流して迎えるわけである。一部の人が死者を綺麗に洗って棺桶に入れるのであるが、このような仕事を職業として持っている人もいる。

孝男は新らしい水を注ぐための水を汲んでくるが、その桶には必ず縄が付いている。この縄を地面にすべさせながら水を汲むのである。その水は暖めて湯潅に使用する。余った水は玄関の内部には捨てないで玄関前の階段の外側に捨てる。この水を上水とよんでいる。死者の化粧が終ったならばホールの中央に座らせる。そして僧侶が法要を営む。その時儀礼用の皿をつくる。十二皿である。これを辞生と云う。辞生とは当人は既に死んでいるのだが、そうする事によって「生きているようになる。」と云うのである。仏に十二皿の盛物を供えると云う習俗はネパールをはじめとして東南アジア一部地域で見かける事が出来る。デ・ホロート[3]は「中国宗教制度」中に、「供へ物の主要部分は、既に遺骸の近くに据えた卓の前に特別に置かれたる。十二箇の台上に置かれる。これは十二皿から成っているが、古代の周朝においては、君主の

一日の主要食は十二皿から成っていた。と言う理由に基づいているのであって、「周礼」巻第四第十六枚には「君主は一日一回は正式の食事をするが、これは壺十二箇で供される。」とある。「辞生」泉州では人をののしる事を云う。たとえば御飯を食べている時に何らかの癖があり、その食べ方が悪かった場合、これは辞生ではないかと云われるのである。つまり死者の為に食べているのと同じではないかとののしるのである。死者の足元のところに穀とかお金を入れた容器を下に置き、道士や僧侶がおかねを出して子孫に配る。その中のおかねを死者の親族が帯にしめており、孝男が白い帯に、他の人たちは青い帯にしめている。これを手尾銭と云う。棺桶に入れる時刻が来たならば死体を棺桶に入れて、セメントと細かい紙布を入れこれを泉州では紙胠と云う。若し夫婦の一方が亡くなった場合には草のシートを半分中に入れる。全部入れ終ったならば蓋を閉めて木の釘を打ち、生前に使用した薬のびんや薬を焼くためのオナベ、草で出来ているシート、箸、茶碗を屋外の広い所に持って行き（定められた所がある。）それを全部焼く。この行為を送草と云うが、最近は自分の近くで焼いているところもある。地元の金持や官史の場合は死者を棺桶に入れる場合、監視官を頼んでずっと観察してもらう。その意味は、孝男が自分の親父や母親が亡くなった場合、精神的に不安定で、若し儀礼に欠けると周囲の人たちに大いなる迷惑をかけることになるので、地元の名士を呼んで監視してもらったりすると云うことである。収縮、つまり死者を棺桶の中に入れる時には監視官がテーブルの上に座って、棺桶の中に入れるもののリストを監視官が示して、ずっとその一つ一つをチェックしてすべてがＯＫならば棺桶の中に入れておくことになる。泉州の風俗では死者に円形の提灯を二つ準備し、白地の上に青色の字を書く。これを孝灯と云う。一つは姓名を記し、一つは〇〇大父・〇〇大母と書く。例えば孫がいる場合には四代、曽孫がいる場合は五代と、この場合男が一つの基準となっている。現在は男女平等になっているので多少赴きを代え、息子の娘、娘の息子も代りとして計算される。

死者に担ぐ籠を準備して、担いでいる人の背中に名前を書いて死者に奉仕すると云うようなことをする。それが終ると道士が来て桃の枝に水をつけて室の内外に散らす。更に塩と米を撒いて包丁で門限をさす。（悪い事を払い去るの意である。）それが終ると親戚の友人たちが礼をする。これを拝鳥と云う。その後棺桶をホール（正庁）に置いて人を傭って棺桶の正面にペンキ（漆）を塗る。家族は毎日の三食の御飯をその人の霊前に供えて黙祷をする。ほぼその日数は死者が何重の衣服を着用しているかによって決まる。例えば七重だったならば七日、九重だったならば九日間である。その時間が終っ

たならばそれで終了。この場合、若しも女の家だったならば「米の壺の赤いつつみ」、「赤い棗の灯」「熱い石炭ガラを入れた高炉」を一個あげなければならない。次に、親戚や友達が死者の家にお土産物を送らねばならない。それを金銀銭と云う。出葬の時のおかねと区別してしてこれを「鳥銀」と云う。その金額は出葬の時よりも少々少な目である。七日以内に親戚や友人たちがその家に行って挨拶をする。その相手の家でも客を招待したり、家の前で礼拝する。霊前では二重の座布団（上は赤・下は白）を敷いておもむろに迎える。大体客が来たならば、その家の男の人が霊前まで案内して、客が座布団の前に座る前に二重の座布団の一部下の白い座布団は少しあけて露出し、少し見えるようにする。それを閉霊と云う。

赤色を用うる事は葬家として吟味が悪い。しかし赤色を用うると云うは、客を尊敬すると云う意味もある。白色を少し客に見せるのは、葬送の意を客に理解させる立場を含んでいるとも察せられる。葬送時に関し客が帰る時には、「さようなら」と別れの挨拶を云わないでそのまま出て行くのが習慣となっている。日本にお[4]いても葬送時の習俗が普通時と反対の行為を為している点何か似通っていることが感じられる。

大体、七日すぎたならば葬家の門を全部閉めて黒いはり紙を出し、そのそばに白いはり紙の上に墨で「閉霊」と書き、棺桶をしばらくの間家に置いて日にちを決めて葬式をすることになる。

二

停柩は泉州の悪い習俗の一つとして挙げられている。どうしてかと云うに、風習迷信に左右され少しでも良い場所を探すために、金銭と時間を費すことになるのである。一部の者の中には生前に用意している場合もあるが、多くの人は死亡してから墓地を探すのである。探す時間がかかるから暫くの間柩を家に置いておくことになる。柩を置く場所は主にホール（正庁）である。子供が途中で死亡したり、悪い病気にかかった場合は停柩は行われない。しぜん、すぐに葬式をすることになる。高齢者が亡くなった場合は子供たちが停柩しなければならない。夜は草を敷いてお通夜をする。守棺客（柩を守る客）の儀は前後合わせて三日は行う。停柩の時間は色々のケースがあるも、昔日においては少ない時で数日、多い時は数年、更に数十年、数百年という時もあったと云われる。[5]歴史的に原留府の堤王は百年置いてから葬式をしたと云われている。乾隆時代の地方史によると、地位のある人は悪病で亡くなった場合室内に停柩することは出来なかった。また、他の場所で死亡し柩だけ運んで帰った場合も自分の家の

中に入れることは許されなかった。その時は近くに小さな小屋を建てるとか、近隣の寺院へ暫くの間預ってもらう場合もあった。ただ余りに停柩をすると、景気が悪かったり、子孫に葬式をする費用がなくなったり、柩の木が腐ってしまい中の死体が見えるようになってしまう場合もある。こんな時には地元の有力者達がおかねを出し合って整理する。そして葬式をやってあげる。柩を暫くの間保管するために椅子の上に置く。これを仙崎と云う。この場合大体柩はホール（正庁）の中央部に置かれるのが常である。若し死者が傍系の場合、つまり、他の家系の場合、または次男などの場合にはホールの右側に置く。中国の古い時代においては、本妻以外の人、つまり二号さんや三号さんの場合は停柩してはいけなかったのである。その資格がないと云うことである。また葬式をする時も正門を通ってはいけない事になっていた。泉州の探の母が側室ならば正門から運び出す事出来ない。本妻を正室と云う。探さん本人や正室が死亡した時は正門から出す事が出来る。停柩、いわゆる柩を保管する時に柩にペンキ（漆）を塗らなければならない。ペンキを塗る厚さによって保管する時間の長さが違うし、葬家の経済力によっても大いに異なる。大体塗って行く順序は一筆一筆塗ってゆくが、多い時には数十回から塗る。棺の表面には一般的に赤、その外側に金色の点を打ちつけて頭の部分に金泊の字を書く。男は福の字、女は壽と書く。また外側にも色々な図案を書き装飾を加える。死者の足元には香炉と蠟燭台を置く。童男・童女が色々な図案、時には死者の名前も書く。または、花鳥、人物の絵を書くこともある。泉州は華僑の多い所で、柩を暫く保管する風習がある。その原因は迷信によるものも多いが、それ以外に子孫が外国に行って、帰るのを待つと云う意味もある。北の門外には割に華僑が少なく南の門外に華僑が多い。それ故南の部分にその風習が多く残り、このように場所によっても柩を保管する時間が変ってくる。若しも家の年輩者が亡くなり葬式後に停柩しないですぐに埋葬すると、周囲の人たちがあそこの子孫たちは親孝行をしないと云われ評判となる。それを恐れるあまり葬式を丁寧にする。開放後はこう云う風習も大分少なくなったが、今でも死後数日ぐらい柩を保管（停柩）する家がまだまだ残っている。

柩を暫く保管[6]して風水師によって良い日を選んで出葬する。その前に「功徳をつくる」と云って、死んだ人の魂を人間の社会から脱出させる大切な儀式をする。葉書で親戚や知人に知らせる、この形式に二種類あり詳しいものと簡単なものとがある。大体、簡単な場合のものは色々な関係を通じて行われる。例えば婚姻とか、同じ世代の人同志とかで、「御先祖が〇年〇月〇日に亡くなりまして、〇月〇日をえらんで管内の〇〇山の麓に埋葬する。その時間は何時に出発するの

で、私の一族を〇時〇〇分に集めて下さい。」それを赤い紙に書いて知らせる。そのためこれを「印于紅紙」と呼んでいる。もっと丁寧なものになると、孝男・孝孫の署名したものを更に写真を入れ、有名人の書面（死者についての悲しみ溢れる詩集など）を加えて配布される。

泉州には葬式のときに出す専門の職人がいて事前に彼等と予約して、墓石上に故人の履歴を書いたり名前を付けたりする。葬式をする時にも一族の長老が葬式上の世話役や監督をする。これを護葬と云う。祖父母がまだおり、父とか母が亡くなった場合は祖父が護葬を、若し父が亡くなって祖母がいれば、祖母が護葬の役をつとめる。出葬の数日前にもう一度御飯を供える。これを椿帰と云う。紙の蓋に幌を貼って死者の名前と地位などを書き僧侶・道士は作法を行う。テーブルに白色のテーブルクロスをかける。これを「九條」と云う。門前に孝灯をつけ、門のところに白いおかねをつける。その数も死者の年令に沿って付け加える。釘でそのかねを刺して付けるが、男だったら竹の針、女だったら木の針で付けるのが通例である。男の場合は門の上の左に、女性は門の右上に付ける。これを寿銭と云う。ドアーの所に衝立（ついたて）を立て葬式の式次第の知らせを書く。泉州の木は主に柏木を用いる。葬式に使用する木も色々ときまりがあるらしい。死者のために名札を書くが神主（位牌）に用いられる。木は上等なものであり、多く柏木が用いられる。木の色のままか、金泊を貼って龍を描（えが）いたような模様の木もあり、木の色のものでは木紋を持ったものが上等とされている。神主は字の数・文字にも基本があり、「興・旺・衰・微」の四字がポイントになる。字の数も四で割って一が余れば興になり、二が余れば旺であり、この二者は非常に良いものである。そのようにしないと吟味が悪いと云う。また外に、兄弟、その人の地位、役職、生年月日等を書く。男の年令が五十一才以上になると「考」とよばれ、成功している事業に成り立っていると言うことであり、女性の場合は妣とよばれ、妣は美しいと云う事である。

三

「位牌に点を打つ儀式」としてデ・ホート(7)は中国宗教制度中に詳細に述べている。「主なる従者の一人をして、位牌に結び付けてあった筆と朱墨とを解かせる。次に召使が朱墨に酒数滴を入れる。もし白い雄鶏を棺車と共に連れて来ている時は、その鶏冠に小さな孔をあけて得た血液若干を入れる。墨に筆を浸し大官は立上って膝まづいている喪主に近寄る。……今や大官は位牌から紐に通した金と赤い布帛を外す。之等二点を手に持ったまま筆を受取り、之に息を吹きかけ、徐々に之をもって太陽を指し、位牌の側面に厳かに数個の点

を打つ。そして小声にて呪文を唱える。……最後に打たれる点は、中央の大きな文字の行の最後の字「主」にである。しばしばこの文字は「王」と書かれ、この文字に点を打つと意義ある文字となる。出葬の前には「神主」の主に、をつけない。つまり「神王」となる。出葬後に、をつけて「神主」となるのである。この時に唱えられる文句は、「吾は牌に点を打つ、牌よ霊性を顕はせ。」と述べるのである。

「葬式に雄鶏を用うる事は、更に他の目的にもある。即ち暗黒界の霊どもを棺に寄せ付けないためである。中国の哲理ではかかる霊は暗黒の原理たる陰と同一視されているから、陽の質を多く含んでいるものは何でも、それらの力を制御する、いやそれらを破壊するところの力も持っている。暗黒の霊どもは日光に対抗出来ないから、毎朝鶏の鳴声を聞くと逃走する。彼等中国の人たちはこの鳥を恐れているのである。」[8]

神主は赤い布に包んで霊卓の中央に置き、墓石には地方の名士を頼んで銘文を書いてもらう。銘文は死者の地位や姓名を印す。開放前はこのような石材を売る店屋もあった。石の上に掘ってある文章を拓本にとり親戚等に配る事もある。柩の上に被せる布があり、その上に死者の名前と地位とを書いて置き、出葬の時それを前に立て武官が馬に乗って後より保護する。親戚や友人が葬式の通知を受取ったならば今までの友情や資金力によって現金であげたり何か字を書いて届けたりする。花輪を送ると云う風習は昔日においては殆んど無かったようだが、明国時代頃より当地においては徐々に行われるようになった。

発葬の日親戚の人たちは悔みのため葬家に赴く。そこでは柩を入れた七日以内と同じ事をする。つまり公祭を行うのである。主祭・陪祭・司信・献香・献爵等の儀を行うのである。それ儀式が始まる前に主祭の人がそれぞれの所に座って、祭りの品を一つ一つあげて祭文を読み、（祭文は何時も白い紙、白い布の上に書かれ、霊堂の右側に掛けられている。）喪家の人たちは酒の席を設けて色々な客を招待して御馳走する。更に道士か僧侶を招いて亡くなった人の魂を俗世界から、あの世へと送るための功徳・法要をするのである。初七日、三七日、五七日などの回向を行う。その時紙でつくった家を焼き、死者をこの世からあの世に送る行事をするのである。この紙[9]家の中には二階建のような大きなものもあり、表面のみでなく、家の中にも多くの家具が置かれている。贅沢なものになると、テレビや車、飛行機なども用意されている。その他男女の紙形をはじめとして、部屋の中には、召使いや牛、豚などの家畜の姿も見られる。金山や銀山なども造られて、これを天国で使ってもらおうとしているのである。死者そのものの功徳をつくるために、まず先に亡くなった長老や先輩をはじめに祀り、次に新らしき故人へと供養をしゆくの

である。先祖を先に祀りてのち、新らしい亡者へと順番を為すのであり、多い時には数十回もその回向をしなければならない。迷信として亡くなって行った魂が恋しくてなかなか俗社会に行きたくない。そのような時に僧侶は功徳をつくりながら古来の色々な例を唱へ諭す。

「人間と云う者はこれから死んで行くのであるが、こんな物語を調べたり。亡くなった魂が死んで、安心して……普通の人もこんな話を聞きながら、笑い声を出したりして、悲しい雰囲気の時に笑い声を聞かせて、非常に意味合を持たせている。」法要・功徳が終ったら、紙で造ったこれから死者の住む家を焼く。そして翌日出葬するのである。

出葬の前に先ず柩を担いで行く人たちを招待する。この人たちが食事をしている間に孝男がそばで跪いて柩を担いで行く人たちに挨拶をする。それは一番大切な仕事をしてくれる人だからである。やがて出棺の時刻が来て柩がドアーを出るのであるが、その時周囲の泣声が大きくなり、親戚一同の者が全部跪いて送るのである。親友たちもみんな集る。これを葬送と云っている。現今[10]の中国では一般的に死後三日目に出棺の儀とり行われているのが通例であるが、富豪の家庭においては五日目、七日目に行う所もある。所により多少の相違はあるも、出棺の時子孫、親戚、縁者の人たちは列をつくって街頭に行き群衆に叩頭の儀礼をする。叩頭とは、拳にて軽く額を叩くのである。これを請居衆とよんでいる。これより出棺の準備を始めるのである。当日の出棺[11]の時刻は風水の妙理に則り陰陽師によって定められる、葬列[12]の規模は、死者の家庭の貧富の如何、故人の社会的地位、子供たちの社会的地位の如何、等により十数人のものから数百人以上に及ぶものも見られる。

出時に見[13]られる習俗として「起霊」がある。お棺を通りに出し棺の上に蓋をする。そののち子供たちは霊轎の前に整列し、死者の孝男（長男）が素焼きの鉢を「起霊」の掛声と共に石に叩きつけて粉々に割ってしまうのである。摔喪（ショワイサン）[14]が茶碗を割るので別名、摔盆（ショワイペン）の儀式とよんでいる。日本にも所によりこの風俗は残っている。死者の生前使用していた茶碗を石に投げつけて割るのは二度とこの世に帰えってくるなと云う意味である。泉州における葬列は、横旗一枚をもって先頭とし、行きは青い色、帰る時は赤い色にする。最近は紙の牌とか、何々さんの出葬であるとか印したものを持ち、両側にはその人の姓を書いた提灯を立て、行く時は白い提灯が前になり、帰る時には後になる。沿線の人たちは楽隊などに交って紙銭をばら撒く者もいる。橋を渡る時に金色の紙を置く者もあり、昔の人たちは、おかねを置かぬと橋を渡ることが出来ぬと信じていたからである。道路におかねをばらまくのは、いわゆる買路銭で、行列の邪魔をしようとする悪魔

を鎮めるためのものである。音楽をタイコ吹が演奏し、武官も馬に乗ってついて行く。次は魂の宿器が二つあり、一つは死者の写真肖像を、もう一つは死者の位牌を持って後に続く。僧侶・道士が沿道にあって魂を引く。次は親戚と友人の行列である。その後は孝男と家族が続き歩むのである。その後を更に楽隊が演奏して続く。孝男は出葬の時、麻の着物を着、ステッキ（竹の棒）を持ち、それに紙を被せる。孝男は白それ以外の人たちは青色のものを所持している。足は草で編んだ靴（草履）を履いている。孝男が若し悲しみの余り涙が一つぱい流れてきても涙を拭いてはいけない。子孫の多い人は棺桶の前に紙でつくった龍頭（たつがしら）を持ち、その中から二枚の布（ぬの）キレを出して子孫（家族や親戚）がそれを縛って行く。泉州ではこれを俗称「龍のヒゲを縛る」と云っている。龍のヒゲの一番前の方はお婿さん二人、或いは孫婿・甥婿とかが当る。これを龍の目と云う。あと周囲は両方の人々、棺桶を担ぐ者は通状八名、一番多い場合は三十二名にもなると云われる。他の紳士や有名人は籠に乗って行く人もあれば、墓地に待機している者もある。行列が城門から出て柩を道路のそばに置き、座布団を敷いて見送り客に挨拶し別れをする。これを辞客と云っている。ただその人たちが墓地まで送るかどうかは、過去の当人との付合や友情の大小によって決定される。墓地では風水師の決められた時刻によって埋葬をする。

埋葬をするに当り先ず、うしろの土を祀る。点主の係の前にて、孝男が先ず東に向って跪き位牌を赤い筆で擦り、その後黒い筆で擦る。終了後籠に乗せて送る。これで葬送は終るわけであるが、これを泉州では〝出山〟とよんでいる。続いて〝返主〟「主に返す。」家の近くまで行くと女性の家族の者が「赤い米をまるめた餅」を、自分の村と他村との境に置き、そこで注いで主を迎える。孝男は位牌を持って帰り自分のホールに置いて、酒と料理を捧げて祀り、これを〝安位〟とよんでいる。親戚や友人と共に食事をするが、〝安位卓〟と云う。その後、葬送前[16]に柩を置いていた所に、米や秤斗（はかりどう）（ますと）などがあり、斗の中には粘糕（ガオ）が入っているが、孝男はその斗を抱えて家の中に持ち帰る。これは斗と糕で、老人は死んだけれども息子や娘たち子孫は、後世を心よく暮して行かれる事を保障されたものと案じたものである。安位が終ったあと、近隣に塩御飯を配る。これを〝油飯〟と云う。このような時に色々な行事を共にする事もある。つまり芝居をしたり、歌をうたったり[17]、軽業をしたり、色々な演技を催すのが常である。その時周囲に観衆が集まり非常にニギヤカとなる。柩が昔故人の付合いの多かった地域を通る場合には、道路の辻々に卓を置き柩を備えて〝路祭〟を施す。その時近隣の人たちが集って焼香をする。孝男は必ず赤い布を一枚施さなければならない。出葬後の儀式は開放後は簡素化された

が、それでも音楽などは流している。華僑は東南アジアの地方に発展しているので、死骸は金持しか中国へ戻ることが出来ない。一般大部分の人たちは居住先の地域に埋葬するのが常である。人は死んでも魂は故郷に帰るものであると華僑の多くは考えているようである、だから泉州には魂を縛ってくると云う意味を持つ〝引水魂〟と云う所が残っている。この地方には土葬と火葬があるも、もともと儒教では火葬を異としている故にこれを許さなかった。—元の時代には少々の火葬は行われたが—仏教では、長期的に肉類を食べなければ、すべて野菜類しか食べなければ、ある一定の期間が過ぎれば火葬をしても良いと云う決まりがあったらしい。

四

中国は古来より礼儀を重んじた国であり、周礼・儀礼・礼記などの古典にも礼儀に関する内容が数多く記述されている。特に儀礼の中には喪服とて、喪の制度が詳しく述べられている。かかる昔日からの古い伝統が喪の習俗を形づくってきたのであった。喪服は昔から白い麻を用い、死者に近親である程目の粗いものをつかい、同時に粗末なものが用いられた。勿論、帽子や靴の面にまでも詳細な定めがあったのである。このような服装は北京近隣を主表としたが、南部のこの地方においても喪服は重要な儀礼の一つとして注目せられたものである。泉州においても人が死亡したあと、親族の人たちは喪服を着用しなければならない。頭には白い布で出来ている帽子を冠り（頭白と云う。）身には孝服を着る。まだ功徳（回向）をしていない時は白い布を、功徳をしている時は麻の服を着ることになっている。それ故、この功徳することを〝変服〟と云っている。孝男は足に麻の靴をはく。女性は布の靴か、靴の上に白い布か青い布を付ける。嫁は靴の後の上に赤布を付ける。外親者（少し離れた親戚）は頭白の中に赤い布を付ける。靴は普通のものを履く。孝男は百日以内は散髪することは許されない。

泉州では喪服として四種を挙げているが、一つは粗い麻の布で出来た衣である。「斬衰（さんすい）」と云い下は閉じないでそのままである。二番目は割に良い布で出来「斉衰（きすい）」と云う。下部は少々細工をしてある。三番目は「大功服」と云い、四番目は「小功服」と云う。これらの服を貸しているところもある。喪服の期間は色々あり、死亡した人との関係によって違いがある。例えば、両親が亡くなった場合に子供が親のため、長男が亡くなって長孫（直接の孫）が祖父母のために、或いは奥さんが主人のために。このような時には通常三年、実際には二十四ケ月間は慎まねばならない。父母が亡くなった時には、上級職に就くための試験を受けてはならぬことになっている。官職に就くことも同様禁じられた。更にその後

の三ケ月の喪服の期間、つまり二十七ケ月間も慎むべきことを要求されている。あとは兄弟のためとか、孫は祖父母のためとか。そのような場合には一年位。祖孫（孫の子供）の場合には五ケ月、親戚や義理の兄弟の場合は九ケ月と云う決まりがある。

漢以来、陰陽五行の説が流行し風水の考え方もだんだんと重要視されるようになってきた。とくにこの地泉州は、丘とか山、河川湖沼が多く、宋時代以後地方経済が発達し風水や迷信も加わって独特な発展を示した。一般に住居を陽宅、墳墓を陰宅と云っているが、風水の場合は主に陰宅について述べられている場合が多い。金持が場所を選ぶ場合その気のかけ方は尋常ではなく大変なものである。中には数十年からの年月をかけ、多くの金銭をつかって風水の先生を傭い、専門的に土地を選んでもらうのである。墓地の大きさには決まりがあり、明、清の時代には庶民の最大の広さは「十八歩カクの大きさを越えはならない。」とされていた。埋葬の方法も、独葬とが合葬、群葬などの別があり、合葬は夫婦単位の葬法であった。墓に関する事々で若しも悪いことが生じた場合には、風水の悪かったせいだと考えられた、その時には埋葬したところを引越さねばならなかった。

中国は北部の北京の地域と南部の厦門・泉州の地域とでは南北の差は非常に大きく、氣温の点から見ても大いなる較差を有していた。南部の中流以上の人たちは腐敗を免れ得る程度の棺桶を使用する故に死後三日以上の余裕を有することも出来たが、下層民の人たちは丈夫な棺を入手出来ないので、死者の死亡後その当日か、翌日の埋葬がせいぜいであった。納棺の当日は家族の人たちはその応対に追われ多忙の一日をすごしたことであろう。死者の孝男（長男）や親族の人たちは適当な墓地を探すために風水師を伴ない各地を訪ずれた。

やがて埋葬すべき墓地が定まると、死者の家族や近親者・縁深き知人たちは喪服にて墓地へと赴く。穴が掘られ周囲では沢山の紙銭が焼かれ、楽士の演奏する中、親族の号泣が一入高まる。棺は徐々に墓穴に沈められる。風水師（方位師）は、穴上に長く張られた紐と磁石によって割り出された計算によって死者が正しい方向に埋葬されているか否やを確かめるのである。その作業は慎重になされ、時間もかかる。人夫の不得意からこの埋葬が少しでも狂ったならば、当人のみならず一家の幸福は永久に浮かばれぬことになると云う。台湾をはじめ東南アジアの華僑部落に行くと、埋葬墓地の上に赤布の折込まれた紐の張ってあるのを見かけることがある。これは風水によって埋葬せられたところの儀礼習俗のあとである。

泉州では人の死亡した場合、四十九日目に四十九日の回向、百日目に百ケ日の回向、二十四ケ月後に三年忌の回向を

行う。死亡後の四十九日までの回向も、初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日と行われるが、最近では一年忌と共に確実に行われるものではなくなった模様である。ただ毎月の初日と十五日には死者の死亡日とは関係なく、朝のお茶と御飯を付けて皆の者が涙を流してお詣りをする。これを「孝初一十五」とよんでいる。このお詣りは永久にするものではなく、故人の三年忌までの間である。三年後は毎回、死者の誕生日と死亡日に祀ることになっている。このような行事を数十年も務めている人もある。小祥と大祥には七旬して魂が戻ってくると考えられている。

五

死者の息の絶えた後に猫を縛っておく。泉州の人たちは若しも死体の上を猫が飛び越えたら大変な事になると恐れており、これを尸変(しへん)とよんでいる。この風俗は中国各地にあり日本にも多くの習俗[18]を伝えている。中国宗教制度中にもザ・ホロト[19]は、最後の息を引き取るや飼猫全部を隣家に移すこと。納棺が済むまでは猫を紐で縛り室内に放さないことを述べている。猫が死体に駆けあがると死体は起き上がり悪事を為すと云われている。そのため死者の側に棒や箒が置かれているのが通例である。猫が虎に外観のみでなく、その特徴や態度・習性までがよく類似しているので、小型の虎も「還魂毛」を持っているとて、猫と同様に恐れられている。わが国においても明月記や徒然草の中に猫股の異名をもって現われ、猫はその魔性妖奇譚[20]ぶりを発揮している。

死者の家族たちが各親戚の家々に死亡の知らせに行く時は、その家の玄関の中に入ることは許されない。そこで大声をあげたらその由を知らせる。知らせ終ったならば水で口を注ぎ帰ることになっている。日本においても同様な習俗は各地で行われている。死体を棺の中に入れる前に枕元に置かれた御飯等は、不浄物として捨てる。死者を扱った人たちは見(けん)刺(し)と云い、新婚者の部屋とか子供の生まれた部屋などには入ってはならない。若し死体を柩に入れる時、その人の当る十二支のうち、仲が良くならぬような間柄の人は、例え孝男と雖も側にいてはならない。また姙婦も棺桶の側にいて見てはならない。また、棺を打つ釘の音を聞いてもいけない。棺桶の蓋を閉めて錠をかける時も、みんな大きな声で、迸迸迸(ちんちんちん)と唱える事になっている。ちんちんちんとは「入る(はいる)」ことであって、おかねの入る事を願ったものである。葬式が終り親戚の女性が帰る時は必ず、飴を渡してあげなければならない。飴をシャブって甘味を残すと云うことである。収棺式後に家に帰る時も鬼などの魔物が着いて来るといけないので、直接家に帰らず、寺などに立寄り線香を上げてから帰ることになっている。棺中に死者を収める時、夫婦のうち、どちらかが

死亡した時は必ず紙で造った小さな人形を柩の中に入れて、生きている人の代理とする。そうしないと二人の関係が悪くなること確実である。葬式に参加した時その家の主人（葬主）には帰る時に「さようなら」などの挨拶を交えてはいけない。せいぜい周囲の人に知らせて置く程度で宜しい。また正月元旦に葬家に伺った時「おめでとう。」の挨拶をしてもいけない。若し交えてしまうと大変な失礼を犯したことになる。また出葬の時柩を担いで途中で休憩する場合は人の家の玄関の前に止めてはいけない。必ず公共の場所とか寺院の前でするよう心掛けることが大切である。また孝服を着て他人の家に立入ってもいけない。出葬の行列も大きな道を通らず、小さな道を通るようにし、住居のいつぱい集まっている所を通る時は音楽を止め、親戚の人たちも孝服の帽子をぬいで歩き、孝男も周囲の人たちに帽子をとり挨拶をしなければ大変失礼なことになる。泉州で一番忌みを避けているのは〝迸戸（しんと）〟と云う事である、それは、死体とか、骨とか、灰を自分の家に入れる。「泉州では足をしっかりと土に踏んでいない。」と云う意味である。つまり死者を棺桶に入れる時に、破った紙とか、セメントを入れる以外に、紙などを焼いた灰を入れる。親族は周囲の人たちに赤い糸を配る。その意味は「お宅でつかったあとの灰を貰いたい。」と云う事である。灰は少し出して瓦の上に乗せ、自分の入口の所に置いておく。また、葬式の家が配り終って帰る時は灰を集めて足で踏み棺桶の中に入れるのである。また、「子孫桶」を伝うる言葉がある。泉州では年輩の子孫を沢山産んだ婦人が、大小便を入れて使った桶を子孫桶と呼んでいる。これはもともと自分の身体から出したものであり、これを記念するために入れているのである。

最後に先述した神主に関連した記事で〝点主〟と云う儀礼がある。この行事は泉州葬儀行事の中で重要なものの一であった。点とは指す事である。大官・紳士と云うべき貴賓に願ってこの行事を行ってもらうのである。先ず赤い筆で太陽を指し、銀朱の筆を用いて妖気を除くと云う、位牌に点を打つ大儀礼であるが、風水の問題として長い間慎重視されているところであった。

引用・参考文献

1、金丸良子「中国山東民俗誌」昭和六十二年三月、古今書院発行、一六一頁。

2、和田謙寿「仏教葬送習俗の研究」一九八七年十月、仏教民俗研究会発行、一四九頁。

3、デ・ホロート「中国宗教制度」第一巻、昭和二十一年八月、清水・萩野目訳、大雅堂発行、六十九頁。

4、和田謙寿「仏教の地域発展」一九九〇年三月、仏教民俗研究会

発行、三四六頁。
5、「泉州旧風俗資料」中国泉州市民政局発行、一九八五年版、六十六頁。
6、「泉州旧風俗資料」右に同じ、六十七頁。
7、デ・ホロート「中国宗教制度」第一巻、昭和二十一年八月、大雅堂発行、一九三～五頁。
8、デ・ホロート、右に同じ、一八〇頁。
9、金丸良子「中国山東民俗誌」右に同じ、一六六頁。
10、金丸良子「中国山東民俗誌」右に同じ、一六八頁。
11、内田道夫「北京風俗図譜」昭和三十九年七月、平凡社発行、九十五・一三八頁。
12、和田謙寿「仏教葬送習俗の研究」中華民国台南市での葬列のヒトコマ、三〇・三十一頁。
13、金丸良子「中国山東民俗誌」、一七〇頁。
14、内田道夫「北京風俗図譜」、九七頁。
15、和田謙寿「仏教の地域発展」仏教葬送習俗の基本的問題その一、二九七頁。
16、和田謙寿「仏教葬送習俗の研究」中華民国の台中での葬列のヒトコマ、七十二頁。
17、和田謙寿「仏教葬送習俗の研究」仏教葬送事物の発展比較考その四、一六一・二頁。
18、和田謙寿「仏教の地域発展」庶民葬送習俗における動物霊としての猫魔、三六九頁。
19、デ・ホロート「中国宗教制度」四十一・二頁。
20、和田謙寿「仏教の地域発展」仏教葬送習俗の基本的問題その一、二八四頁。